

中野重治

本とつき

あう法

本とつきあう法

一九八七年二月二十四日 第一刷発行

著者 中野重治（なかの・しげはる）

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟二〇一九二

電話東京二九一―七六五一（営業）

二九四―六七一一（編集）

振替口座六一四一二三

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© UME NAKANO 1987 Printed in Japan

ISBN4-480-02108-6 C0195

本とつきあう法

中野重治



筑摩書房

目次

著者まえがき 9

I

わが文学的自伝 14

日本詩歌の思い出 28

濫読のあと 44

私の読書遍歴 55

岩波文庫と私 59

古本の記憶 62

ある古本の運命 ホフマン・カンペ版『ハイネ全集』のこと 67

II

本とつきあう法 78

旧刊案内 102

忘れえぬ書物 室生犀星『愛の詩集』 121

一冊の本 細井和喜蔵『女工哀史』 130

名著発掘 西村酔夢『血汗』 133

私の古典 マルクス『猶太人問題を論ず』 136

控え帳 145

子供の本雑談 152

読みかじりの記 161

『万葉集』のこのへんのところ 167

秋水の『兆民先生』 172

『司馬遷』と『吉野秀雄歌集』 177

室生犀星ベスト・スリー 184

『伊丹万作集』全三巻 187

『ジュネーヴ人の手紙』 191

スウィフト「ガリヴァー旅行記」 198

「カチューシャ（復活）」から 210

「即興詩人」について 215

III

『斎藤茂吉全集』第八巻を読む 222

身から出た錆 『万葉の世紀』を読む 228

革命家の回想と面目 新しい版の『自伝』 234

『幸徳秋水の日記と書簡』を読む 236

一つの小さな無尽蔵 『エロシエンコ全集』を持ちえたという喜び	249
眺めては読み、読んでは眺める 土門拳の『筑豊のこどもたち』	252
おもしろくてためになる不便な本 『戦後日本の思想』を読む	255
二つの『詩概説』	270
にがい親近感 エレンブルグの『わが回想』第三巻を読む	278
三十二歳から四十三歳まで 『秋田雨雀日記』第一巻	284
気楽な読み方 『大航海時代叢書』のこと	287
補註	292
発表誌控え	298
解説 中野さんの「遍歴」 澤地久枝	301

本とつきあう法

著者まえがき

私も人なみにいろいろと読んできた。読んだものについて書いて書いてもきた。それを集めていま一冊とするのは、もともと友人のすすめによったものではあったが、私自身、それもそうだなと思つてのことでもあった。ところで、いろいろ読んできたとはいつても、私の読み方は何かの基準に立つものではなかった。系統だったものでは無論ない。「私の読書遍歴」を問われて自分で書いてもいる。

「歩きまわったからといって遍歴したということにはなるまい。四国西国とか、学問上・宗教上の問題とか、何かそこに目安がなければ遍歴といえぬという気がするが、その気持ちからいうと、わたしなどは読書遍歴はしなかった、いくらか歩きまわったことは歩きまわったが、コースはなかった、札所もなかった、さらにいえば、歩きまわるところまで行かなかった、まずはぶらついたというところだという気がする。」

けれども、ぶらついたまではいつてもそこに何かはあっただろう。せめて好奇心があつ

ただろう。何かの楽しさ、楽しみを求める心があったらと思う。私は楽しみ、楽しさを求めた。言葉が大袈裟になるのをいとわなければ美しさを求めた。いっそう大袈裟になるが理にかなった正しさを求めた。といっても、もともと何か基準に立ってのものではないから、すべていわば行きずりのものである。たのしさ、美しさ、それを求める求め方において私が行きずりの心持ち状態にいたわけである。しかし世間には人が多い。やはりそんな行きずりの心持ちでこれを読んでくれる人があれば私は満足する。

これを私は新聞、雑誌のもとめに応じて書いた。この種のものを私にもとめた新聞、雑誌のその思いつきに私は感謝する。しかし次手にいえば、このなかにある「旧刊案内」というのは私の思いついたものであった。新刊紹介、新刊案内というのはい多い。しかし古いものがどしどし忘れられて行く。そこで私がそんなことを思いついた。取りあげたものは無論行きあたりばったりである。しかしこれはいくらか人によるこぼれた。私の生涯で、自分の思いつきが取りあげられたことはあまりない。これは、数すくないその一つである。なお最後に、「本とつきあう法」という標題のことで言っておきたい。もとこれは『週刊読書人』でつくったものであった。たくさんの人がこの題で書いて、評判がよかったと見えてあとで読売新聞社から一冊になって出た。『本とつきあう法』という一冊である。今度自分の一冊をつくることになって私はあれこれと名を考えた。そうしてつまるところこれ以上の名はなかった。

そこで週刊読書人社、読売新聞社の諒解を求めてそれを得ることができた。この種の標題には、薬の名、菓子の名のような商標登録ということがないそうである。私は週刊読書人社、読売新聞社に感謝する。

一九七四年十一月十一日

中野重治

I

わが文学的自伝

私に最初の文学的教養を与えたものは雑誌類だった。私は五つぐらいでいくらか読めた。学校へ行くようになってからは手あたり次第に読んだ。十ちがいの兄があつて、彼の読みふるしが家^{うち}にたくさんあつたのをわけわからずに読んだのだった。

読んだのは『少年世界』、『日本少年』、『少年』、『冒険世界』、『中学世界』の類^{るい}だった。五年生ぐらいからは自分で買つても読んだ。そのころ『少年世界』、『日本少年』などは定価十銭だった。しかしせっかく買いに行つても本屋にないこともあつた。

『少年世界』には木村小舟^{しょうしゅう}や巖谷小波^{いわや ささなみ}が書いていた。巖谷のおとぎばなしは私にはほとんどおもしろくなかった。むしろ「忘れぬ中^{うち}に」という回想録のほうがおもしろかった。『日本少年』のほうは雑誌全体がセンチメンタルだった。私は、中学生になってからだったが、『日本少年』のようなセンチメンタリズムは子供に悪いもんだと考えたことがあつた。

あるとき小波が腸チフスにかかつて死にかけたことがあつた。読者からたくさん見舞いの

手紙が集まった。小波は幸い恢復して、見舞いにたいするお礼の写真がぶつぶつの網目で雑誌にのってきた。私は実に実に不思議な気がした。網目というものがわからないため、なぜああいうぶつぶつの写真をこしらえたのか理解できないのだった。しかしそれよりも、子供たちが小波に見舞状を出したということが私には珍しかった。小波の大病は私にも気にかかっていたが、だからといって見舞状を送るなどは思いもよらぬことだった。私は父などへのほか手紙を書いたことはなかった。小波へ手紙を書くなどは百姓の村では恐らく大それたことだった。それをする子供がたくさんいるのだということとはほんとうに不思議なことだった。私は投書ということはずにしまった。

『少年世界』や『日本少年』の物語の世界はむろん私を引きつけた。しかしあるいはそれ以上に表紙や口絵や挿絵の世界が私を引きつけた。細木原青起が『少年世界』の口絵に登場してきたのなどは実にあざやかだった。作者の名も私には珍しく思えた。『日本少年』では川端竜子^{りゅうし}が少年を引くような色彩を出していた。私はこの絵かきを最初女だと思っていた。尾竹^{おたけ}国観、尾竹^{おたけ}竹坡、井川^{いせんが}洗厓、中野修二、谷洗馬^{せんば}、渡辺審也^{しんや}というような人たちも挿絵をかいていた。渡辺審也の絵を見て私は発見をしたことがあった。それは学校の本の絵がやはり渡辺のだということだった。私は学校で私の発見を話したが誰も賛成しなかった。教科書の絵には署名がないので証拠はなかった。同じ人でなければこんな絵は出来ぬのだということの説明は私にはできなかった。竹久夢二^{たけひさゆめじ}は詩と絵とをかいていた。